

《研究ノート》

根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見

—中尾佐助博士の農耕文化の大類型区分をめぐって

佐々木 高明*

1. 世界の農業と農耕の大類型

世界の農業の大類型を設定する試みは、農業地理学の分野ではかなり早くから行われてきた。1930年代の半ばには、従来の研究を総括したような形で、有名な C. S. Whittlesey による「世界の農業地域」が発表され、地球上の農牧業が、その経営形態の特徴（具体的には①作物と家畜の組合わせ、②作物の栽培法と家畜の飼育法、③労働・資本・組織の土地への投下の集約性と生産額、④生産物の消費形態—自家消費か商品生産か、⑤家屋と農業経営のための諸施設の5つの指標を用いた）などによって13の大類型に分類された [WHITTLESEY 1936]。戦後、1964年には国際地理学会に農業類型についての検討委員会が組織され、類型区分の指標などの検討が行われたが、結果として Whittlesey の農業地域区分を大きく変更するまでには至らなかったらしい。例えば D. B. Grigg の *The Agricultural Systems of the World* など、戦後の動向を示す著書においても、採用された9つ農業の大類型は、表1の如きもので Whittlesey のそれを微調整したものにすぎない [GRIGG 1974]。

これらの農業の大類型区分は、現代の地球上における農牧業の経営上の諸特徴にもとづいて区分したものであり、農耕文化の系統や特色にもとづいて類型区分されたものではない。その区分はあくまで、現在の世界経済の中で、一定

*ささき こうめい、国立民族博物館

表1 最近の経済地理学で用いられる農業の大類型区分

1. Shifting agriculture
2. Wet-rice cultivation in Asia
3. Pastoral nomadism
4. Mediterranean agriculture
5. Mixed farming in western Europe and North America
6. Dairying
7. The plantation system
8. Ranching
9. Large-scale grain production

の拡りをもつ農業の類型を抽出したものにすぎない。具体的にその多くは麦作（穀作）と家畜飼育を統合させたヨーロッパ型の混合農業の変異型にすぎないといえることができる。

これに対し、農耕文化の系統やその特色にもとづく農耕の大類型の設定は、全く異なった視点に立つものといえることができる。周知のように、地球上のいくつかの地域で、それぞれ独立にいくつかの作物がセットになって栽培化され、特有の性格をもつ農耕の複合体が生み出されてきた。こうした農耕の起源とともに、農耕をめぐる生産から消費に至るさまざまな文化的特色が地域ごとに形成され、それらの諸特色が発展・交流する過程の中から、地球上に相互にきわめて顕著な特色を有する、いくつかの農耕の大類型が創出されてきたといえることができる。

このような農耕の起源と系統の差異にもとづく農耕の大類型の設定は、既述の現代世界の農牧業の経営類型にもとづく農業類型の区分に較べれば、農耕文化の理解のためにはるかに有効なことはいふ迄もない。この種の農耕の起源と系統にもとづく農耕の大類型区分の具体例を比較検討してみると、そのもっともすぐれた区分は、中尾佐助博士が『栽培植物と農耕の起源』[1966]（以下、『農耕の起源』と略称する）および「農業起原論」[1967]（以下、「起原論」と略称する）で提唱された世界の農耕の大類型区分だと私は思っている。

以下、そのことについて検討を加えたいが、中尾のこの2つの論著の先後関

係については、「起原論」の末尾に「この論文は1961年に脱稿していたが、印刷が種々の理由でおくれていた。その間1966年に、岩波書店から『栽培植物と農耕の起源』と題した新書版を出版した。現在からみると、若干改正を要する点もでてきたが、立論の大要に反しないものはそのままとした。……」と中尾自身が記しているように、「起原論」がまず執筆され、それにもとずいて『農耕の起源』が著されたものだということに注意しておきたい。

ところで、中尾は「起原論」の冒頭で、自らの結論に当る4つの農耕の大類型を示して、次のように述べている。

「人類は狩猟および採集の段階から、それぞれ独立した4つの異なった農耕形式を発展させた。その農耕形式は、それぞれ特色ある農耕文化を形成するとともに、その発展と歴史の進行の途を通じて相互に影響しあいながら、現在の世界文化の担い手となった。また、現在の地域的変異を由来せしめた。」その4つの農耕形式とは、「起原論」によると

- (1)ウビ農耕 [東南アジア起原の根栽農耕]
- (2)カリフ農耕 [アフリカおよびインド起原の雑穀・夏作農耕]
- (3)ラビ農耕 [西アジア・地中海沿岸起原の麦・冬作農耕]
- (4)新大陸農耕 [根栽農耕および夏作農耕]

『農耕の起源』では、ウビ、カリフ、ラビという難解な呼称を廃して、(1)には根栽農耕、(2)にはサバンナ農耕、(3)には地中海農耕の名称をあてているが、旧大陸において3つの農耕の大類型（中尾の表現に従えば「農耕形式」）をみとめる点について変わりはない。また、新大陸の農耕については1つの農耕形式としているが、その中にはマニオクやサツマイモ、ジャガイモなどを主作物とする根栽農耕とトウモロコシを主作物としたサバンナ（雑穀）農耕の形式をとるものの在することを指摘している。しかし、中尾にとり新大陸の農耕は常に「応用問題」なのであり、議論の中心は旧大陸のそれにあった。したがって、本稿でも旧大陸の農耕、とくに後述のように、中尾自身によるオリジナリティーが強調された根栽農耕と雑穀農耕に焦点をあてて検討をすすめることにしよう。

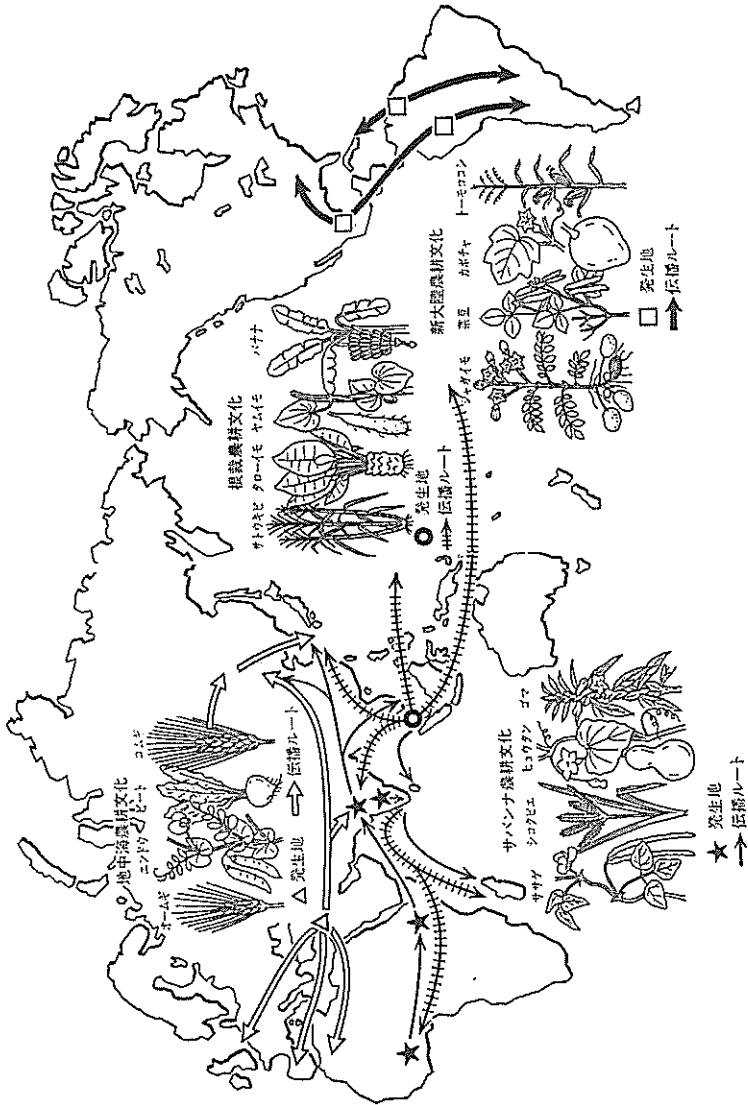


図1 中尾佐助博士による世界の4大農耕類型 [中尾 1966による]

2. 根栽農耕とその文化の確認

中尾の農耕類型論で、もっともユニークな点は、旧大陸の農耕の大類型として、オリエントに起源したムギ作農耕のほかに、バナナ、タロイモ、ヤムイモ、サトウキビなどの栄養繁殖作物を主作物とする根栽農耕と雑穀類を主作物とする雑穀農耕（中尾の命名ではサバンナ農耕）の2つの大類型をみとめたことである。

まず、根栽農耕とその文化については、東南アジアやオセアニアの古い文化圏に芋類を主作物とする農耕の存在を想定する考え方は、かなり以前からみられた。例えば R. Heine-Geldern は著名な東南アジア民族誌 *Südostasien* [1923] の中で犁耕文化を伴わない農耕には、果樹や塊茎類を栽培する古い段階と穀類の栽培を主とする新しい段階のものがああり、前者はインドネシア東部を中心に分布し、ヤム芋・タロ芋・サトウキビ・バナナ・パンノキなどを主作物とすることを指摘している。わが国においても鹿野忠雄は、第2次大戦中に、主としてオランダの植物学者の資料を中心に、インドネシアにおける穀類の分布を論じた論文のなかで「球根類の文化層と稲米の文化層の間に粟類を主とする文化層が挟まって居た事が想像される」と述べ、東南アジアにおけるもっとも古い農耕文化として球根（イモ）類を主作物とする文化層の存在を想定している [鹿野 1946]。戦後、岡正雄が日本民族文化の形成を考えるに当り、メラネシア的な芋栽培文化が縄文時代中期ごろに渡来したと想定したのも、その当否はしばらく措くとして、上に述べたような文脈の中で生み出てきた学説ということが出来る [岡 1958]。

このように東南アジアやオセアニアの民族文化の研究者の間で、もっとも古い農耕形態として芋栽培を想定する考え方が、以前から存在していたことは間違いない。しかし、この種のタロイモ・ヤムイモをはじめ、バナナ、サトウキビなどを主作物とする農耕の類型を、新大陸のマニオクやサツマイモなどを主作物とする農耕類型とともに、栄養繁殖作物栽培を中心とする根栽農耕

(Vegetative planting culture) という形で一般的に捉え、これを種子繁殖作物を中心とする種子栽培農耕 (Seed planting culture) と対比させ、地球上における2大農耕類型の1つと位置づけたのはアメリカの地理学者 C. O. Sauer であった。

彼は、この種の旧大陸における根栽農耕は最古の農耕で、それは東南アジアのモンスーン地帯に起源し、ブタやニワトリなどを伴い、太平洋地域をはじめ、中国南部や日本、熱帯フアリカや地中海地域などへ伝播したと主張した [Sauer 1952]。それ以前の欧米の学者による農業起源論は、中近東に起源したムギ作農耕に一元的に焦点をあてたものが多かったため、この Sauer の学説が学界に与えた衝撃はきわめて大きなものであった。

しかし、この Sauer の学説にはいくつかの弱点があった。肝心の東南アジアの土着農耕、特にヤムイモ・タロイモをはじめ東南アジア起源の栄養繁殖作物について Sauer 自身にファーストハンドの資料はなく、主に I. H. Burkill の編纂した商品事典 [1935] に依拠する点が少なくなかった。また古い根栽農耕の地中海地域への伝播についても必ずしも説得的なデータはあげられていない。

このため Sauer の学説は発表後にかなり強い批判を浴びた。Sauer 自身、その後1956年には、Vegetative planting culture というユニークな概念を大きく後退させ、最古の農耕は主として掘棒を用いて焼畑を営む熱帯地域の *hoeculture* であるとし、その類型の中に根栽農耕民も雑穀農耕民も含ませる学説を発表している。古いこの *hoeculture* が広がったのちに、大型家畜を飼育し、穀物栽培と犁耕を特色とする新しい農耕とその文化が世界各地へ展開したとしているのである [SAUER 1956]。その論旨は、Ed. Hahn 以来の「鋤耕作から犁耕作へ」という古典的な仮説の展開と大筋において一致するものであり、1952年に新しく提唱された「根栽農耕」の概念は、そこではほとんど放棄されたように思われる。

これに対し、中尾の提唱した根栽農耕あるいはそれに支えられた根栽農耕文化の内容は格段に詳しく、よく整備されたものになっている。Sauer 以後10年ほどの間に、バナナの植物遺伝学的研究に大きな業績を残した Simmonds の研

究 [1959]、ニューギニアにおける自らの発見にもとづきサトウキビのニューギニア起源説を展開した Artschwager らの新説 [1958]、あるいはメラネシアを中心とした地域の伝統的農耕の実例を豊富に報告した Barrau の報告 [1958] など、東南アジアからメラネシアにかけての根栽農耕の起源と展開をめぐる新しい研究がつぎつぎと公開された。また、中尾自身も1944年にミクロネシアのポナベ島で典型的な根栽農耕文化の実態調査を行ったのをはじめ、1950年代以降もカラコラム、ブータン、シッキム、アッサムなど東南アジア周辺の諸地域の学術調査を重ねてきた。その豊かな学識と経験が、新・旧の文献資料を有効に活用し、根栽農耕とその文化の特色を再構成するのに成功したといえるのである。

とくに『農耕の起源』では、バナナ、ヤムイモ、タロイモ、サトウキビの4つの作物を中心にパンノキ、バンドナス、ヤシ類などを栽培する東南アジアに起源した根栽農耕（ウビ農耕）の特色を要約して、次の諸点を指摘している [中尾 1966 : 52-58]。

①無種子農耕であること。すべての作物の繁殖は根分け、株分け、さし木などの栄養繁殖のみで行われていること。②倍数体利用が進歩している。根栽農耕の主要作物は品種改良が多面的で、倍数体品種が高度に育成されている。③マメ類と油料作物を欠くこと。根栽農耕はイモ類が主力で穀物を欠くことがまず重要だが、マメ類と油料作物を欠くことも重大である。このため、この根栽農耕文化の食事の特性は、澱粉質と糖分に集中し、栄養的に偏っている。したがって漁撈や小規模な狩猟が必要である。④掘り棒農耕。この農耕の農具は掘り棒のみで、鋤や犁は伝統的には用いられない。⑤裏庭から焼畑へ。耕地の形態は多種類の作物が混作される裏庭型（キッチン・ガーデン型）の小耕地からブッシュ・ファローを伴う焼畑農耕へ発展した。⑥ハトムギの利用まですすむ。この農耕の最終の発展段階になってハトムギを唯一の穀物として開発した。⑦根栽農耕文化の伝播。バナナ・ヤムイモ・タロイモ・サトウキビの組み合わせが確立したあと、この強力な農耕複合体は図2に示すように、東はポリネシア、西はインドを経てマダガスカル、アフリカの中、西部（ヤムベルト）にまで伝

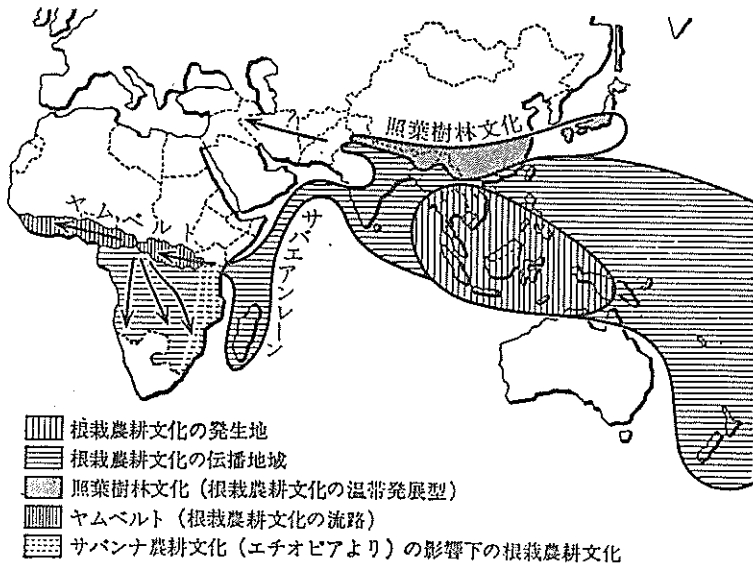


図2 東南アジア起源の根栽農耕文化の伝播 [中尾 1966による]

播し、また、北方に向かっては東南アジアの温暖帯に展開し、そこで根栽文化の温帯変容型といえる「照葉樹林文化」が生み出されたとしている。が、この点については後に改めて検討することとしたい。

以上のように根栽（ウビ）農耕文化の特色を要約した中尾は「この農耕文化はきわめて特色の強いもので、地中海地域に発生したムギ栽培の農耕文化の影響で東南アジアに根栽農耕文化が成立したとのイギリス人の説はとうてい受け入れがたい。両者の農耕文化基本複合は根本的に異質なもので、両者はまったく無関係である」と結論づけている [中尾 1966 : 51]。

根栽農耕とその文化は、ムギ作農耕のそれと対比しうる地球上における農耕の大類型の一つであることを、欧米の学者の伝統的な見解に反して、中尾は強く主張したのである。

3. 鋤農耕から犁農耕へ—E. Werth の学説とその問題点—

さきにも少しふれたように、ヨーロッパの学界で農耕の起源と展開をめぐる支配的な見解は、Ed. Hahn 以来「鋤耕作から犁耕作へ」という進化の図式にもとづくものであった。このような伝統的な視点に立ち、Sauer と相前後した時期に、農耕の起源と展開を世界的規模で論じたのは E. Werth であった [WERTH 1954]。彼によると、もっとも古い農耕の形態は、熱帯地方に起源した鋤農耕 Hackbau であったという。この鋤農耕の中には、彼の場合、掘棒農耕 Grabstockbau も含まれているが、とにかくアジアの熱帯地方に起源したこの古い鋤農耕が温帯地方へ広がる過程の中から、より高次の犁農耕 Pflugbau が発生したとしている。

この場合、Werth が原鋤農耕的作物と分類した作物表をみると、タロイモ、ヤムイモ、サゴヤシ、ココヤシ、バナナ、パンノキ、サトウキビ、キマメ、ササゲ、ケツルアズキ、キュウリ、ヒョウタン、ワタそのほか、栄養繁殖作物（根栽作物）を中心に、幾種類かの豆類や果菜類を加えたものがあげられている。これらを鋤農耕（掘棒農耕を含む）に伴う古い作物とみなしているようである。これに対し、犁農耕は、西北インドとその近隣地域で起源したものと想定され、コムギとオオムギ、キビとアワ、熱帯アフリカ原産の3つの雑穀（モロコシ、トウジンビエ、シコクビエ）および稲などを主とする穀物栽培 Getreideanbau を行うことが最大の特徴であり、牛などの大家畜飼育を伴うとしている。

Werth はこのほか、農具や家畜やさまざまな技術の比較研究なども加え、壮大な仮説の展開を行っているが、彼の学説の根幹を構成しているのは、既述のように Hackbau から Pflugbau へという伝統的な文化進化の図式であったことは間違いない。しかも、この古典的な仮説の枠組みの中へ、これもかなり古典的な栽培植物起源論をもち込み、その両者を組み合わせってしまったところに Werth の学説の大きな問題点があったように思われるのである。

具体的に Werth 説では、犁農耕文化のもっとも重要な特徴として指摘され

た穀物栽培の中に、前述のように、ムギ類とともに各種の雑穀類や稲までが含まれている。そのため、もともと穀物栽培を知らなかった熱帯アフリカの鋤農耕地帯でモロコシ、トウジンビエ、シコクビエなどが、また東南アジアの鋤農耕地帯で稲が、それぞれ主作物としてかなり以前から栽培されていた事実については、犁農耕の特色が形成された後に、犁農耕文化（アフリカの場合は牛飼育文化）の影響がもう一度、鋤農耕地帯へ及んだ結果である、というやや苦しい説明を行っている。もし、そうだとすると、熱帯における雑穀栽培や稲栽培（稲作）とムギ類を主作物とする本来の犁耕穀物栽培とが同一の農耕類型として捉え得るものか否か。両者の特色の異同については、必ずしも明確になっていない。

そういえば、さきの Sauer の場合も、栄養繁殖作物栽培農耕（根栽農耕）（Vegetative Planting Culture）に対置する類型として、種子作物栽培農耕 Seed Planting Culture をあげ、一群の種子作物の中にムギ類も、雑穀類も、稲も入れてしまっている。この点は Werth の穀物栽培 Getreideanbau の扱いと余り変わらない。この種の根栽農耕に対して種子作物農耕を対比させる考え方は、その後、例えば J. Ucko と G. W. Dimbleby が主催した『植物や動物の馴化と利用』についての討論 [1969] や C. A. Reed を中心とした『農耕の起源』についてのシンポジウム [1977] などにおいても、一般的に受け入れている。だが、種子作物（穀類）栽培の中での、ムギ類の栽培と雑穀類の栽培および稲栽培との関係、あるいは三者の異同等については上の 2 つのシンポジウムを含め、欧米の研究者の間では、今日に至るまでほとんど論議されてこなかったようである。

4. 「雑穀農耕文化」の概念の確立

この点について、中尾の提出した農耕類型論あるいは農耕文化論においてはきわめて明快である。すでに述べたように、中尾は旧大陸の種子作物栽培農耕（穀物栽培文化）を 2 つの類型に区分し、従来から注目されてきた冬作のイネ

科作物，すなわちムギ類を主作物とする「麦作農耕」のほかに，新たに，夏作のイネ科作物，すなわち雑穀類（millets）を主作物とする「雑穀農耕」という農耕の大類型を設け，これを麦作農耕という大類型と対置させることにしたのである。その結果，根栽農耕，雑穀農耕，麦作農耕という旧大陸の3大農耕類型の設定ができ上がったといえることができる。

この場合，中尾はムギ類を主作物とする農耕を「ラビ農耕」あるいは「地中海農耕」とよび，雑穀類を主作物とするそれを「カリフ農耕」あるいは「サバナ農耕」とよんだが，本稿では理解しやすくするため，それぞれ主作物名を冠して前者を「麦作農耕」，後者を「雑穀農耕」とよぶことにしたい。

このような雑穀農耕ないし雑穀農耕文化という概念を新たに中尾が確立した背景には，中尾自身がインド世界のフィールド・ワークにおいて雑穀栽培の実態をつぶさに見聞したという事実が重要だが，他方，「起原論」の執筆にかかる直前に，G.P.Murdockが膨大な文献資料を駆使してまとめた広範なアフリカ民族誌“*Africa*”が出版されたことも重要であった [1959]。それによって中尾は西南アジアや東南アジアとともに，アフリカ（西アフリカとエチオピア）が世界の農耕の起源地の1つで，雑穀農耕の複合体が，そこで形成されたという新しい学説に接することができたのである。

Murdockは250を越える数多くの民族誌データをもとに，フォニオ，トウジンビエ，モロコシ，アフリカイネなどの雑穀類をはじめ，ササゲ，ゴマ，オクラ，ヒョウタンなどで構成される sudaric complex とよばれる農耕の複合体が，紀元前4500年ごろより以前にニジェル川上流で起源したとしている。その後，この複合体は東方へ影響を及ぼし，エチオピア高原周辺でシコクビエ，テフなどを栽培化し，アフリカ特有の雑穀農耕文化が形成されたと考えた。中尾はこの学説を全面的に受け容れるとともに，図3に示すように，アワ，キビ，コドラ，インドビエその他の雑穀類やキマメなどの豆類，キュウリやナスなどの果菜類などの栽培化のセンターが，インドの北西部と南部にあることも指摘している。しかも，インドではモロコシ，トウジンビエ，シコクビエはじめアフリカ原産の作物が早くから栽培され，初期の農耕文化の段階でアフリカから

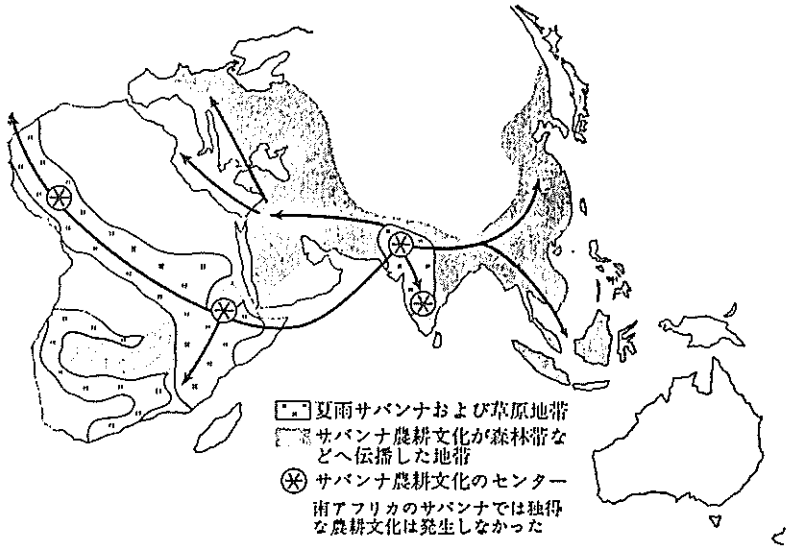


図3 サバンナ農耕文化の分布と伝播 [中尾 1967]

の作物の伝播があったことを注目している。

いずれにしても、アフリカ・インドの両センターで起源した雑穀農耕には、次の4つの特徴があるという。①その作物のすべてが、カリフ（夏作）のミレットを中心とした夏作物で、地中海地域に発生した温帯の冬作物を中心とする農耕とはっきり区別できること。しかも、雑穀農耕の作物群にはイモ類がない。②各種のマメ類を作物とし、植物性の蛋白を食糧の中に大量に加えたこと。③ウリ類を含め、各種の果菜類を栽培化し、果菜類を副食用の蔬菜として安定させたこと。④優秀な油料種子をもつ油料作物を栽培化し、植物油を食糧に加えるようになったことなどである。雑穀農耕は雑穀類を中心に、豆類、果菜類、油料作物を加え、栄養的にきわめてバランスのよい作物体系を完成したとしている。

さらに中尾は、この雑穀栽培に基礎をおく農耕文化の特色についても重要な指摘を行っている。まず、イモ類やバナナなどと異り、雑穀農耕の作物は水を

加えて加熱調理することが必要で、そのための容器、つまり土器の発達を前提とする。また雑穀は調理の第1段階として脱穀と精白の作業が必要で、そのための用具としてタテギネとウスが開発され、それはアフリカから東アジアに至る雑穀栽培地帯全域に広く分布している。このうちインド以東の地域では雑穀類は粒食する例が多いのに対し、アフリカでは粉食が多く、原始的な雑穀用の製粉用具としてはサドルカーン（馬鞍型石臼）がひろい分布を示している。また、これらの雑穀農耕地帯では手鋤による耕作が中心で、いくつかの作物を混播し、條播栽培を行うことが多く、牛を使う犁耕は後に麦作農耕文化の影響によってもたらされたと考えられている。

さらに夏作の雑穀栽培は、おそるべき雑草との闘いになる。このため雑穀農耕の大きな特色の1つは除草を非常に入念に行うことだと中尾は強調している。除草が徹底的に行われるため、雑穀農耕地帯では2つの重要な事実が生み出されてくる。その1つは「雑穀栽培と生態的に結合してその分布域を拡大したミレット畑特有の雑草というものの存在を認めえない。この点はムギ作農業と……まったく異っている。したがって、ムギ作の中から数知れぬ二次作物 secondary crops が生まれたが、ミレット農業の中からは二次作物はまったく生まれてこなかった」という。

さらに第2の大きな特色は「この完全除草へ向かったミレット農業は、必然的に大面積の畑をつくることを困難ならしめた。反当り収量はムギの散播（栽培）よりいち早く向上できたが、全収穫量の増大は、除草努力だけでは向上困難な壁に早くうちあたってしまう。ミレットを主体とするカリフ農耕の生みうる余剰は、反当り収量の増大にもかかわらず、全収量の壁のため早い時代に極限に達するわけで、古代インドやシナの文明が開花したころに、その壁にはほぼ到達したと思われる。……ここに、カリフ農耕が古代に開花したにもかかわらず、その後の停滞をひきおこした真の原因があるのだろう」と論じている [中尾 1967: 402]。雑穀農耕文化の人類史的意義を、きわめて的確に論じたものということができる。

いずれにしても、夏作の雑穀類を中心に豆類・果菜類に油料作物を加えた特

有の作物複合体とそれに支えられた雑穀農耕文化の存在をはじめて明らかにし、それを冬作のムギ類を中心とする麦作農耕とその文化に対置して、旧大陸における種子作物農耕を2つの大類型に区分したのは中尾のもっとも大きな業績であったといえることができる。中尾以前はいうに及ばず、後述のように、それ以後もこれほど明快な農耕の大類型区分を行った学説のみられないことを、我々は銘記すべきである。

5. 雑穀農耕と「稲作」の位置づけ

夏作のイネ科の作物を「雑穀」と定義し、この雑穀類を主作物とし、サバンナ地帯に起源した「雑穀農耕」の概念を確立したことによって、稲作の位置づけがきわめて明瞭になったことも中尾学説の大きな業績の1つであった。

中尾によると、サバンナの乾燥地帯で起源した雑穀農耕がその周辺部にまで伝播し、湿地帯に遭遇したとき、いくつかの湿性のミレットの利用がはじまり、その中から稲が選び出されて、栽培化されたというのである。この現象はアフリカのサバンナの周辺でも、インドのサバンナの周辺でも起こった。アフリカではニジェル川の中流域でアフリカ稲 (*Oryza glaberrima*) が栽培化され、インドではその東部でアジア稲 (*Oryza sativa*) が栽培化された。

これらの稲作の特色について、中尾は次のように述べている。「イネはただ湿地に生ずるだけで、農耕文化の基本複合のタイプとしては、他の雑穀と同じカテゴリーに入るものだ。……（アフリカでも、アジアでも）イネは夏作の雑穀類の1つということになって、他の雑穀からイネを基本複合としてはっきり区別する理由はない。つまり“稲作文化”などという、日本からインドまでにひろがる複合は存在しない。そこにあるものは、根栽文化複合の影響をうけたサバンナ農耕文化複合である」[中尾 1966：26-27]。

ここで稲作あるいは稲作文化というものの考え方を、従来のそれに較べ、中尾は革命的といってもよいほど変更しようと試みたのである。

ただ、ここで「稲作文化は存在しない」と言い切った中尾の発言について、

若干のコメントを付け加えておくと、作物複合として稲作をみると、単一の稲のみで構成され、他にマメ類とか、イモ類とか、稲と常に複合する固有の作物群が見られない。したがって、稲作文化は、中尾のいう本来的な農耕文化複合の1つとしてみとめることはできないということである。

いずれにしても、稲を数ある雑穀の1つとして位置づけ、稲作農耕を雑穀農耕という大類型の中に包括して考えるという中尾の解釈は、従来、世界の誰もが考えたことのない画期的な考えであった。稲作農耕という、アジアのモンスーン地帯に広がる巨大な農耕類型については、その系統論的な位置づけは、Sauer も、Werth も、さらには後述する Harlan の場合も、必ずしも明快ではなかった。とくに水田耕作という特異な栽培形態に眩惑され、欧米の研究者の間には、タロイモ水田と関係させて稲作の起源を考え、稲作の系統を考察しようとする仮説が意外に根強く主張されてきた。例えば東南アジア最古の農耕遺跡かとされるスピリット・ケープの発掘者である C. Gorman は、タロイモと稲とは、どちらも低湿地に適応した作物群であるから、両者は「一対の姉妹作物」(Sister domesticates)として古い時代に東南アジア大陸部で起源したものと考えた。「一対の姉妹作物」という表現は Gorman の特有のものだが、似たような考え方は、H. Conklin の中などにもみとめられるようである [1980 : 38]。

しかし、タロイモと稲は両者とも確かに水田で栽培されるものではあるが、両者の栽培状況を詳しくみると、現実に両者が同一の耕地で大量に混作される例はほとんどみられない。また、特定の作物にはそれぞれ固有の雑草が伴っているのが普通であるが、このような随伴雑草で両者に共通するものはほとんどないといわれている。また、かつて Sauer が想定したようなイネがタロイモ水田の雑草であったという事実もない。ということは、タロイモと稲を姉妹作物とよび、起源の問題で両者を関係させることは無理だという結論になる。

欧米の学者の間では、前にも述べたように、一般に夏作の雑穀の複合体についての関心が低く、したがって知識の蓄積も少ない。このため、稲についても湿潤地帯の作物ということで、十分な検討も経ずに、熱帯の水田で栽培される

タロイモに結びつけて考えてしまうことが多かったようである。この点に重大な過誤があったということができる。

一般にアジアのモンスーン地域における農耕の起源と展開を考える場合には、そこに展開する農耕は、夏雨気候に適応したものであり、そのほとんどすべてが夏作物を主とするものであるから、サバンナ起源の夏作の作物複合体の存在を無視しては、そもそも議論が成り立つはずがない。この点にはじめて注目したところに中尾の着想のすぐれた点がある。しかも、その雑穀の複合体の中に稲と稲作を位置づけ、その起源や系統の問題を解決しようとしたところに、中尾の学説の大きな意義が見出しうることを、私はくり返し強調しておきたいと思うのである。

ところで、この稲作の問題に関連し、その文化的特色をムギ作のそれと比較して「起原論」の中で、中尾は次のような指摘を行っている。

「イネは、収量の安定が得やすく、豊産性で、しかも貯蔵力に富んでいることなど、従来のミレット類をはるかにしのいでいる。これは、農業以外の文化を発達させ、維持するに好都合であるが、さらに高次の社会発展のためには、ムギ類とくにコムギは植物学的に多くの種からなっているにもかかわらず、粉食してパン類をつくると、その食味にはあまり大きい差はないと考えられる。とくにセンベイに似た初期のパンではそうであった。……ゆえにコムギでは、粉食しているかぎり、古代の大経済圏で相互の流通において、品質問題は重大とならなかった。

ところがイネは、植物学的に一種であるにもかかわらず、粒食の習慣も関係して、食味の品種間差異がひじょうに大きく、それも文化が高まるにつれて食味差がいっそう増大して感じられる。その結果、同じ地域に住んでいても、民族やカーストの差で、米の食味に異なった要求をもつばあいが生ずる。たとえばインドでは、上流のブラーミンは小粒の匂いの高い米をもとめ、農民の多くは大粒の淡味のものをもとめる傾向がある。ほかに赤米を欲するもの、長粒をもとめるもの、par-boiledのもののみを欲するものなど、嗜好の分化がはげしい。そのためにインドでは、標準米がほとんど標準の意味をもたないくらいで

ある。これが同一地域内にあると、米の流通交換は困難になる。この困難を克服するために食味嗜好の均一化が進行しなければ、米の生産は高次の社会発展の束縛因子となるわけである。日本では、幸い徳川時代の年貢米操作により、大阪堂島の米相場が標準となって価格標準が成立し、その取引を通じて日本人の米の食味嗜好の地ならしがおこなわれたと判断される。この嗜好の整理が一応完了した後で、近代的技術によるイネの増収が進行しはじめたのは、幸いであつた」[中尾 1967:425-426]。

この指摘は『農耕の起源』の中では削除されているが、最近の国産米とタイ米の食味差の問題など、米をめぐるいくつかの問題を考える際にも、きわめて示唆に富む指摘だといふことができる。

6. 照葉樹林文化の提唱

麦作農耕という欧米の学者が古くから重視してきた農耕類型に対置して、根栽農耕と雑穀農耕というユニークな2つの農耕の大類型を設定した中尾は、さらに日本列島を含む東アジアの暖温帯の農耕の文化史を考える上で、きわめて重要な概念として、「照葉樹林文化」の考え方を提起した。そのことはよく知られる通りである。

照葉樹林文化についての詳細な解説をここで行うことはできないが、中尾は旧大陸における農耕の3大類型の存在を最初に主張した「起原論」の中で、「照葉樹林農耕文化の成立」という項目を設け、そこで次のように述べている。

「東亜の熱帯雨林のなかに生まれたウビ農耕に対し、その北方の照葉樹林にそれに対応するような野生のイモ類（クズ・ワラビ・テンナンショウ類）を利用する農耕の存在がいまや浮かびあがってきた。その農耕は、熱帯のタロイモのなかからサトイモだけを受け取り、ヤムイモの中から温帯原産のナガイモだけを栽培化した。……温帯の照葉樹林帯は自然の恵みが熱帯より少ないだけに、そこでの農耕文化は熱帯より高度な技術がなければ成立しがたい。それゆえにこそ照葉樹林文化は、西方から伝播してきた高級な農耕をよく吸収して、

その新しい基礎の上にミレット・オカボなどをはじめ、ソバやマメ類を栽培化することができたのである」[中尾 1967:368]。

つまり、照葉樹林文化は、それが提唱された最初のころには、熱帯で成立した根栽農耕文化の北方展開型あるいは温帯に適應した変容型として性格づけられていたことは間違いない。出版年の関係から、事実上「照葉樹林文化」の概念の最初の発表の場となった『農耕の起源』においても、基本的な考え方は同じで、クズやワラビあるいはタロイモと同じ天南星科のmamシグサのような野生のイモ類をはじめ、ドングリなどの堅果類の水さらし技術の問題から照葉樹林文化の解説がはじめられている。それは、当初、根栽文化の温帯変容型という形で照葉樹林文化が捉えられていたからに外ならない。

当時、照葉樹林帯にひろく分布する共通の文化要素としてあげられたのは、水さらし技術のほか、昆虫のマユから糸をひいて絹をつくる技術、ウルシあるいはその近縁の樹木の樹液をとって漆器をつくる技法、茶樹の嫩葉を加工して飲用する慣行、麴というカビの塊りを使って穀類を発酵させた酒の存在、シソやエゴマの栽培、あるいは柑橘の利用などである。このような共通の“文化遺産”によって特徴付けられる照葉樹林文化は「きわめて山岳的な性格をもち、本来の形態は山棲みである」。またその文化は「採集経済の段階から焼畑での雑穀栽培へとすすんだ。そしてその中心地域はシナ西南部ということになる。」と述べている [中尾 1966:75]。

1966年に『農耕の起源』が刊行されたころの照葉樹林文化についての知識はまだこの程度であった。それが急速に深まり、照葉樹林文化論の体系が一応形を整えるのは、上山春平が司会し、筆者もそれに参加した『続・照葉樹林文化』の討論からであった [上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976]。

この討論においては、従来の照葉樹林文化の考え方に大きな修正と追加が行われた。詳細は上の著作を参照して頂きたいが、その要点を列記すると次のようである。

①照葉樹林文化は、当初は熱帯に発生した根栽農耕文化の北方展開型あるいは温帯変容型と考えられて出発した。しかし、この討論では根栽農耕と照葉樹

林文化の關係が基本的に再検討された。その結果、照葉樹林文化における根栽文化（イモ栽培文化）の影響は、はじめに考えられていたほどではないことがわかり、典型的な照葉樹林帯の農耕は雑穀栽培を主とする焼畑農耕から出発することが確認された。中尾は「起原論」の中で、照葉樹林文化の発展段階を(1)野生採取段階、(2)半栽培段階、(3)根栽植物栽培段階、(4)ミレット（雑穀）栽培段階、(5)水稲栽培段階の5つに区分していたが、このうち(3)の根栽植物栽培段階をこの際、削除しようということになった。また、(1)と(2)をあわせて農耕以前の段階と考えると、照葉樹林文化の発展段階は、(1)プレ農耕段階、(2)雑穀を主とした焼畑段階、(3)稲作ドミナントな段階の3段階に整理されることになった。

②この討論では7章のうちⅡⅢⅣの各章をそれぞれ「ジャポニカ・ライスの起源」、「モチ種穀物の創出」、「照葉樹林文化と焼畑」にあて、新たにジャポニカ型の稲の栽培とその利用、あるいはモチ種の雑穀や稲を創出し、それを好んで食用にするとともに儀礼的に利用する慣行が照葉樹林帯で顕著にみられること、さらに雑穀を主とする焼畑が典型的な照葉樹林文化を支える主要な生業形態であることなどが、新たに指摘された。また、アジア稲の起源地については、渡部忠世、中川原捷洋両氏らの説をうけ入れ、アッサム・雲南地域を起源地と考えるようになり、従来の説が変更された。

③照葉樹林文化を構成する文化要素として従来指摘されていた、水さらし、茶、絹、ウルシ、麴酒、柑橘とシソなどのほか、新たに納豆のような大豆の発酵食品やコンニャク、あるいはハンギング・ウォールや鶴飼などの諸要素が加えられ、さらに歌垣や十五夜とイモ祭りの習俗、焼畑の開始季に行われる儀礼的狩猟の慣行、オオゲツヒメ型の死体化生神話その他、習俗や儀礼や神話などに関する諸要素についても照葉樹林帯にひろく分布し、照葉樹林文化の構成要素と考えられるものの存在することが確認された。

④『続・照葉樹林文化』の討論で、特筆すべきは、上に述べた照葉樹林文化の諸要素の分布を重ね合わせ、照葉樹林文化のセンターを仮りに設定したことである。雲南高地を中心に西はインドのアッサムから東は中国の湖南省に至る

半月形のこの地域を、西アジアの「肥沃な半月地帯」に対して、われわれは「東亜半月弧」と名付けることにした。中尾自身の用語例でいうと、照葉樹林文化の中心になるこの地帯は『農耕の起源』ではロロ・センターとよばれていたものが、『照葉樹林文化』[上山(編)1969]の中では「雲南省あたりの山岳部」あるいは「雲南センター」という表現に変わり、この討論で「東亜半月弧」という名称に落ち着いたことになる。

「起原論」の中ではじめて提起された照葉樹林文化の概念は、『続・照葉樹林文化』の討論によってかなり整理され、一応その形を整えたといえるのである。その後の照葉樹林文化論の展開については、佐々木の『照葉樹林文化の道』[1982]や中尾・佐々木共著の『照葉樹林文化と日本』[1992]などを参照して頂きたい。

いずれにしても、東アジアの暖温帯に展開した照葉樹林文化の存在を想定することは、東アジアの農耕文化史を考える上で、きわめて重要な仮説的枠組みを与えるものであり、それは、この地域の農耕文化史の再構成に非常に大きな寄与をなしたといえる。また、照葉樹林文化は、上述のように、ユニークな文化的特色によって構成されているが、農耕文化の類型としてみれば雑穀農耕文化の一亜型として位置づけられることが明らかになった。さらに東アジアに特徴的な水田稲作文化も、この照葉樹林文化を母胎に成立したものだと思えることにより、稲作文化の成立を類型的に理解することが容易になったことも注目しておかねばならない。

7. その後の研究の展開と中尾学説

「起原論」や『農耕の起源』などを中心に、これまで世界の農耕文化類型の設定をめぐる中尾学説の特色をみてきたが、その後の新しい学説の展開の中で、中尾の主張は、いまなお今日的意義を成しているであろうか。最後にこの点をめぐり、簡単に検討を加しておきたい。

根栽農耕文化の起源の問題については『農耕の起源』の発表後、J. Alexan-

der and D. C. Coursey [1969] や堀田満 [1982] らの研究により、タロイモやヤムイモの起源をめくり大きな研究の進展がみられた。年中高温で多湿な熱帯降雨林地帯ではイモ類は澱粉を貯蔵する必要はなく、むしろ乾燥季や低温季が明瞭な熱帯モンスーン地域や温暖帯で、休眠季に養分を貯めるためイモが肥大化することがわかってきた。旧大陸の根栽作物の中心をなすタロイモ（サトイモ）やヤムイモ（ヤマノイモ）には、起源的に熱帯系と暖温帯系の2系列があり、それぞれ別の発展過程を辿ったらしいと想定されるようになった。東南アジアやオセアニアで調査を重ねた堀田はこの点をめぐり、次のように述べている。

「東アジア（の暖温帯）に起源したイモ栽培は、東南アジアからポリネシア（の熱帯）にひろがったイモ栽培農耕とは、農耕文化の構成要素である作物群が異なっている。……東アジアから東南アジア、太平洋諸島にみられるイモ型栽培植物の二類型は、熱帯系が乾期休眠型を中心に、暖温帯系が低温休眠型を中心に発達してきたものであり、両者は起源のところで一方から他方へ借用がおこった可能性もあるが、系譜的には相当異なった発展の過程をたどったと考えてもよいと思われる」[堀田 1982 : 35-36]。

前述のように、われわれが照葉樹林帯におけるイモ栽培の重要性を改めて再検討したのは、このような堀田らの意見を取り入れたからである。また、根栽農耕文化の起源についても、熱帯モンスーン地域で起源した熱帯系のイモ類（例えば2倍体のサトイモ類やダイジョ、ハリイモ、カシュウイモなど）の複合体が南下して、マレーシア世界でバナナやココヤシなどと結びつき、さらに東南アジア島嶼部からメラネシアに至る地域でパンノキ、サトウキビなどが栽培化されて、典型的な根栽農耕が生まれ出されたと考えられるようになった。

メラネシアを中心にした根栽農耕文化の起源とその展開については、その後、D. E. Yen [1972] や J. Golson [1985] はじめ、多くの学者によりいくつかの新しい事実が追加され、種々検討が加えられた。これらの新事実の追加と検討の結果は中尾の提起した根栽農耕文化の考え方を全体として補強し、精緻化する方向にあるとみてよいようである。

補強といえば、中尾は1985年の「畑作文化の起源をめぐるシンポジウム」において、真の農耕が出生してくる前の段階、つまり先農耕段階を①雑草種子採集 (Weed seed collecting)、②ナッツ・ドングリ澱粉採集 (Nut and acorn starch collecting)、③根茎澱粉採集 (Stem and tuber starch collecting) ④草原種子採集 (Grassland seed collecting)。の4つの類型に区分し、農耕の起源とのかかわりを論じている。

ここでは中尾が研究の早い時期から主張していた「半栽培」の概念が、採集の対象となる植物群の特色にもとづいて具体的に整理して示されている。なかでも根栽農耕文化の起源と深くかかわる③の類型では、野生のタロイモやヤマイモの澱粉採集のほか、サゴヤシの機能を重視している点が注目される。サゴヤシについては、その後、いく人かの研究者により検討が加えられているが、ここではそれらについては省略することにしたい。

中尾学説の中で、もっともユニークな主張の一つが「雑穀農耕文化」の概念の提唱であったことは、すでにくり返し強調してきたところである。しかし、雑穀農耕、とくにアフリカにおけるその起源と発展をめぐる、中尾が主として依拠したのは、前述のように、民族学者の Murdock の、おもに HRAF に集積したデータにもとづきアフリカの民族文化史を鳥瞰した著述 [Murdock 1959] であった。だが、周知のように、その後、アフリカにおける雑穀類の起源とその展開については、J. Harlan を中心とする学派のくわしい研究が次々と公表された。また、アジアにおける雑穀の起源と展開についても、阪本寧男らによる実証的な研究が発表されている。これらの新しい学説を参照しても、中尾の学説は、根栽農耕文化の場合と同様、あるいはそれ以上に補強されたともみて差支えない。

中尾が『起原論』や『農耕の起源』を執筆した段階では、モロコシやトウジンビエ、フォニオ、シコクビエなどのアフリカ原産の雑穀類がサハラ南緑やエチオピア付近のサバンナ地帯に起源したらしいことは想定できても、くわしいことは不明であった [中尾 1969]。それが明確になったのは1960年代の主として後半以後に発表された Harlan らの研究によるところが大きい。アフリカ起

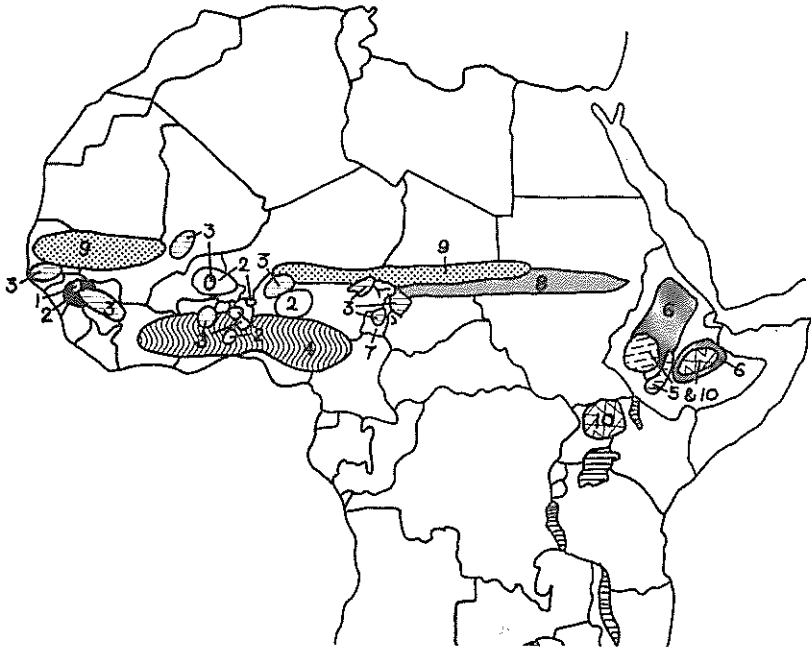


図4 アフリカ起源の作物の栽培化推定地域 [Harlan, 1972による]

1. *Brachlaria deflexa* ; 2. *Digitaria exilis* and *Digitaria iburua* ; 3. *Oryza glaberrima* ; 4. *Dioscorea rotundata* ; 5. *Musa ensete* and *Guizotia abyssinica* ; 6. *Eragrostis tef* ; 7. *Voandzeia* and *Kerstingiella* ; 8. *Sorghum bicolor* ; 9. *Pennisetum americanum* ; 10. *Eleusine coracana*.

源の雑穀類を主とした作物群の起源の地は図4に示したような非常に広い地域であることが明らかになった [HARLAN et al. 1976, HARLAN 1977]。

Harlan は別の論文で、農業の起源地には、近東や華北のような明確なセンターとよべるような例もあれば、アフリカのように起源地が広く分散してノンセンターとしかよべない地域のあることを指摘している [1972]。同一の趣旨は世界の農業の起源を論じた彼の主著 *Crops and Man* [1975] においても展開

されている。しかし、華北の中国センターや東南アジア・オセアニアノンセンターを中心とした、インド以東の夏雨気候をもつモンスーン地域の農耕の起源とその展開については、欧米の学者によくみられるように、彼の場合もファーストハンドの資料が乏しく、したがって、考察の成熟度も低い。このため Harlan のそれは、旧大陸全体をバランスよく見通し、とくに夏雨モンスーン地域の農耕の特色を雑穀農耕（稲作を含む）という類型で捉えた中尾学説に較べると、説得力に欠ける点が少なくないと思われるのである。

アフリカとともに雑穀農耕の起源と展開にとり重要な地域は、インドと中央アジアの地域である。その後、この地域の雑穀類についてのくわしい実態調査は、阪本寧男らにより行われた。その結果、モロコシ、トウジンビエ、シコクビエのほか、コドラ、サマイ、ライシャンなどの土着の雑穀類を大量に栽培するインドが、雑穀の一大センターであることが改めて確認された。さらに古代以来、東アジアの農耕にとって重要な作物であったアワとキビについては、「東アジア—アフガニスタン—インド西北部を含む地域で、おそらく紀元前5000年以前のに栽培化され、この地域よりユーラシア大陸を東と西へ漸次伝播し、その過程で各地域に適應した地方品種群が成立した可能性が高いと考えるのが、より妥当である」という結論に達している [阪本 1988 : 126]。『農耕の起源』ではアワやキビの起源については、通説のように華北ではないことが強調されていた。だが、その起源地に関してはインドの西北部やデカン半島西部らしいと推定されていたにすぎず、必ずしも十分に検証されたものではなかった。阪本によるアワ・キビの中央アジア—北西インド起源説の提唱は、むしろ中尾学説の弱点を補完する大きな意義を有するものであった。中尾自身も後に、この阪本の学説に賛成し、積極的に受け入れている [上山・渡部 (編) 1985 : 169]。

この種の新しい学説と関係して最後に問題になるのは、稲作の起源と展開、あるいは稲作文化の問題であろう。すでに述べたように、中尾は稲を雑穀類の一種とみなし、その起源地をはじめは東部インドの低湿地に求めていた。だが、後に渡部忠世によるアッサム・雲南センター説が提唱されると、それを積極的に受け入れ、照葉樹林文化論を強化する一助とした [佐々木ら 1976 : 60]。ま

た、中尾自身による稲作文化に関するまとまった所論は遂に発表されるには至らなかったが、上山春平が司会し、渡部・中尾・佐々木・谷らがメンバーに加わった「稲作文化」についての討論の中で、中尾は現実に見て見ることのできる稲作のさまざまな技術要素の比較検討から出発して歴史的考察に至る一連の考察を通じ、稲作文化の特質に迫ろうとした。その結論のひとつは「インドには稲作はあるが、稲作文化はない」という表現に象徴されるように、東南アジア以東とインドの稲作文化の差異を明確にしようとした点である。インドの稲作文化の基層には、家畜を飼育し、犁耕や乳利用を伴う麦作文化が存在するのに対し、東南アジア以東の稲作文化には麦作文化の影響はほとんどない。むしろ東南アジア以東の稲作文化は、古くは根栽農耕の伝統をもちながら、その後、雑穀栽培への依存度を高めていった照葉樹林文化の展開形態として捉えようという見方が、中尾の発想の根底にあったと思われるのである [上山・渡部 (編) 1985: 23-26]。

いずれにしても、根栽農耕、雑穀農耕、麦作農耕という農耕あるいは農耕文化や大類型は、照葉樹林文化や稲作文化のような農耕文化の^{サブタイプ}亜類型の特色を考察する際にも、きわめて有効な分析概念として機能していることは間違いない。

なお、アジアにおける稲作の起源については、最近、遺伝学者の佐藤洋一郎らにより、長江起源説とでもよぶべき新しい学説が提唱されはじめている [佐藤 1992, 佐藤・藤原 1992] この新しい学説についても中尾はユニークなコメントを有していたと思われるが、それを聞く機会を逸したのは残念であった。ただし、この稲作の長江起源説を受け入れたとしても、それは照葉樹林文化論をはじめ、中尾の学説の大綱に影響を与えるようなものではないと考えられるのである。

以上、「起原論」『農耕の起源』以後、発表された新しい学説について、管見にふれる範囲でそのいくつかを紹介し、中尾学説との関係を検討してきた。これらの新しい説の多くは、中尾学説を充実・補強することはあっても、それを否定するものではなかったといつてよい。すでにくり返し強調してきたように、従来、欧米の学者によって注目されてきた麦作農耕 (文化) のほか、旧大陸に

は根栽農耕（文化）と雑穀農耕（文化）の2つ大類型が存在することを明らかにしたのは中尾の大きな業績であった。なかでも、種子農耕の中に冬作のイネ科作物を主作物とする麦作農耕類型と夏作のイネ科作物を主作物とする雑穀農耕類型の2大類型の存在することを明確にした点は、Harlanをはじめ、その後の欧米の研究者によっても指摘されていない極めてユニークな類型区分であった。雑穀農耕の概念の確立によって、世界の農業人口の過半を占めるユーラシア大陸東部の農耕文化の特色が明快に捉えうるようになったことは、中尾学説のもっとも顕彰に値する点だということができよう。

かって今西錦司は、その著書において「中尾佐助は、かれの『農耕の起源』のなかではじめて栽培植物農耕発生の多源説を体系化し、これを4つの独立に発生した農耕文化として提出した。この本は英訳でもすれば、日本人が世界に誇りうる名著のひとつになることであろう」と記している [今西 1968]。中尾の栽培植物の起源と農耕の大類型設定の学説は、発表後、約30年を経過した今日でも、なお力強い説得力を有し、世界に誇りうる学説として生きつづけているのである。

あとがき

11月20日（1994年）は中尾佐助先生がお亡くなりになってから一周年に当たる。悲報に接したのはつい昨日のようにも思えるし、今でも温顔に一寸皮肉な笑みをたたえて「佐々木君、知っているかね。」と私の傍らにきて質問なさるような気がしてならない。

私をはじめ中尾さんに親しく接するようになったのは、昭和35年ごろに京大人文学研究所で毎週開催されていた今西錦司博士の主催される共同研究会に加えて頂いてからのことである。その当時、研究会では中尾さんの「農耕起源論」の素案が議論され始めていた頃で、私はその学説の規模の雄大さと理論のユニークさに圧倒されたことがなつかしく思い出される。

この研究ノートは、中尾さんの数多くの業績の中から特に「農耕の起源とそ

の類型」に関する問題を中心に、その業績を紹介し、評価しようとしたものである。具体的には今西錦司先生の遷暦記念論文集の中に書かれた「農業起原論」という論文と、その後、岩波新書として刊行された『栽培植物と農耕の起源』という2つの著作を中心にして、中尾さんの農耕起源論と農耕文化論のユニークさを種々の角度から論議を試みてみた。

ただ、中尾さんの業績は周知のように農耕起源論と農耕文化論にとどまるだけではなく、例えば『料理の起源』や、『花と木の文化史』という興味深い著書にみられるような研究の拡がりがある。また『分類の思想』という著書に示されたような文明の展開や組織を論じた、大へんすぐれた一種の文明論もみられる。このように中尾さんの業績は多方面にわたるものではあるが、今回は農耕起源論と農耕文化の大類型論を中心とし、中でも「根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見」という点に焦点をしばって、紹介と評価を行った。中尾さんの一周忌を記念して、私個人の気持ちを込めた一文である。

引用文献

ALEXANDER, J. & COURSEY, D. C.

1969 The origin of yam cultivation, UCKO, P. J. & DIMBLEBY, G. W. (ed). *The Domestication and Exploitation of Plant and Animals*. Duckworth

ARTSCHWAGER, E. & BRANDES, E. W.

1958 Sugarcane : origin, classification, characteristics and descriptions of representative clones, *USDA, Agr. Handb. NO.122*.

BURKILL, I. H.

1935 A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula, I and II. Crown Agents for the Colonies.

BARRAU, J.

1958 *Subsistence Agriculture in Melanesia*, Bernice P. Bishop Museum, Bulletin, 219.

CONKLIN, H. C.

1980 *Ethnographic Atlas of Ifugao : A Study of Environment, Culture and Society in Northern Luzon*, Yale University Press.

GOLSON, J.

1985 *Agricultural Origin of Southeast Asia : A View from the East*, MISRA, V. N. and BELLWOOD, P. (ed), *Recent Advances Indo-Pacific Prehistory*, Oxford & IBH Publishing Co.

GORMAN, C.

1977 *A Priori Models and Thai Prehistory : A Reconsideration of the Beginnings of Agriculture in Southeastern Asia*, REED, C. A. (ed), *Origins of Agriculture*. Mouton Publishers.

GRIGG, D. B.

1974 *The Agricultural Systems of the World, an Evolutionary Approach*. Cambridge University Press.

HARLAN, J.

1972 *Agricultural Origins : Centers and Noncenters*, *Science*, vol. 174.

1975 *Crops and Man*, American Society of Agronomy and Crop Science Society of America.

1977 *The Origins of Cereal Agriculture in the Old World*, REED, C. (ed), *Origins of Agriculture*, Mouton Publishers.

HARLAN, J., J. DE WET and A. STEMLER (ed)

1976 *Origin of African Plant Domestication*, Mouton Publishers.

HEINE-GELDERN, R.

1923 Südostasien, BUSCHAN, G (hrsg.), *Illustrierte Völkerkunde*, II, Strecker und Schrode. 小堀甚二 (訳) 『東南アジアの民族と文化』 聖紀書房, 1942.

堀田 満

1983 「イモ型有用植物の起源と系統—東アジアを中心に—」 佐々木高明 (編) 『日本農耕文化の源流』 日本放送出版協会.

今西錦司

1968 『人類の誕生』河出書房.

鹿野忠雄

1946 「インドネシアに於ける穀類一特に稲粟耕作の先後の問題」『東南亞細
亞民族学先史学研究Ⅰ』矢島書房.

MURDOCK, G. P.

1959 *Africa, its peoples and their culture history*, McGraw Hill.

中尾佐助

1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店.

1967 「農業起原論」森下正明・吉良竜夫(編)『自然—生態学的研究—』
(今西錦司博士還暦記念論文集1)中央公論社.

1969 『ニジェールからナイル—農業起源の旅』講談社(復刻版は『農業起
源をたずねる旅』岩波書店, 1993).

中尾佐助・佐々木高明

1992 『照葉樹林文化と日本』くもん出版.

岡 正雄

1958 「日本文化の基礎構造」『日本民族学大系・2』平凡社.

REED, C. A.

1977 *Origins of Agriculture*, Mouton Publishers.

阪本寧男

1988 『雑穀のきた道—ユーラシア民族植物誌から』日本放送出版協会.

佐々木高明・阪本寧男・田中正武・中尾佐助・堀田満・樋口隆康・渡部忠世

1976 「討論・栽培植物と農耕の起源」『季刊人類学』7-2.

佐々木高明

1982 『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会.

佐藤洋一郎

1992 『稲のきた道』裳華房.

佐藤洋一郎・藤原宏志

1992 「イネの発祥中心はどこか」『東南アジア研究』30-1.

SAUER, C. O.

1952 *Agricultural Origins and Dispersals*, The American Geographical Society

1956 *The agency of Man on the earth*, THOMAS, W. (ed), *Man's Role in Changing the Face of the Earth*, The University of Chicago Press.

SIMMONDS, N. W.

1959 *Bananas*, Longmans.

UCKO, P. and G. W. DIMBLEBY

1969 *The Domestication and Exploitation of Plants and Animals*, Aldine Publishing Co.

上山春平 (編)

1969 『照葉樹林文化—日本文化の深層』中央公論社.

上山春平・佐々木高明・中尾佐助

1976 『続・照葉樹林文化—東アジア文化の源流』中央公論社.

上山春平・渡部忠世 (編)

1985 『稲作文化』中央公論社.

WERTH, E.

1954 *Grabstock, Hacke und Pflug : Versuch einer Entstehungsgeschichte des Landbaues*, Ludwigsburg. Eugen Ulmer. 藪内芳彦・飯沼二郎 (訳) 『農業文化の起源—掘棒と鋤と犁』岩波書店, 1968.

WHITTLESEY, D.

1936 *Major Agricultural Regions of the Earth*, *Annals of the Association of American Geographers*, 26.

YEN, D. E.

1972 *The Origin of Oceanic Agriculture*, *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania* VII.